

百文字？書評の続き！

『屍人荘の殺人』はやっぱり、**読者とフェアに向き合っているところ**がいいですね。巻頭の見取り図や事件の状況を、説明口調のような不自然な形にならずに把握させてくれますし、少しミステリー読んでいる人なら「ここが怪しいのでは？」と思えるところがちらほらあります。しかしそれも作者の叙述トリックだったりして、「ええー？」ってなって見返してみたら確かに要素はあったみたい。そのため、たまに推理が当たったりすると嬉しさもひとしおです。

また、このシリーズはSFとかオカルトの設定を取り入れているのも特徴です。しかしながらSFやオカルトの設定はこの物語の上で**状況の一部**でしかなく、あくまで事件は人の手によって起きています。特殊な条件下で登場人物は何を考えて動いているのか、想像しながら読んでみると面白いですよ！

『アルケミスト』は、小説としてすごく面白いことはもちろんなのですが、この本が世界中で今なお読まれ続けているのは、この本に書かれている「夢をあきらめないこと」が誰の胸にも刺さるからではないでしょうか。

こういう本は、読んだ人の体験に重ねて感じ方が**それぞれある**と思うので、あくまで僕の感想ですが、自分の心の声を聴けますか？というのが大事なことなのかなと思いました。現代では様々なことが統一化されていて、私たちは手続きや義務などに目が行きがちです。そんな生活の中にある心の声の発露を見つけられれば、生きている瞬間にハリが出てくる。そういうことではないでしょうか。

